

第70回大腸癌研究会

「括約筋切除を伴う肛門温存術の妥当性」会議資料

日時： 2009年1月15日（木） 10：00-11：00

場所： 都市センターホテル（東京都千代田区） 6F603号室

* modified FIQL(以下 m-FIQL)論文について

「Development and validation of a modified Fecal Incontinence Quality of Life measure for post-operative evaluation of Japanese patients with rectal cancer」

英文雑誌に投稿中

* 括約筋温存術各術式で施設にかかわらず2峰性になる問題について

m-FIQL得点の多変量解析で

Wexner Continence Grading Scale (WCG)、うつ状態、術前期待との乖離（期待はずれ）が関与していた。

* 括約筋温存術とAPRとの術後QOLの比較

アンケート内で括約筋温存術とAPRとの共通設問のSF36とHospital Anxiety and Depression Scale (HADS)について比較検討を行った。

結果) SF36での尺度（日常役割機能{身体/精神}・社会生活機能・全体的健康感・心の健康）およびHADS（抑うつ・不安）においてすべての術式間に有意差は無かった。

* まとめ

APR・ISR (partial/subtotal/total)・ESR症例に対して日常生活に関するアンケート調査を行った。括約筋温存術ではWCG・排便機能・SF36・HADS・FIQLにおいて各術式間で有意差は認めなかったがm-FIQLが2峰性になった。

これについて詳しく解析してみるとその原因として、WCG・うつ・術前期待との乖離などが関与していた。

つまり、術前の期待とのずれなどを感じている人は同じ排便機能・精神状態であってもm-FIQLが高い傾向があり、術前にどれだけ術後の機能の状態などについて説明され、本人の心の準備ができていたかが関係している可能性が高い。

一方、APRと括約筋温存術各術式をSF36・HADSでQOLを比較したところ有意差は認めなかった。

今回の委員会で最終解析結果を得たため、プロジェクト研究「括約筋切除を伴う肛門温存術の妥当性」を終了とした。

今後、腫瘍学的結果と術後QOLの結果をそれぞれ論文化し英文雑誌に投稿予定である。